

論考●特集・宇宙

宇宙人類学の挑戦

岡田浩樹 (神戸大学大学院国際文化学研究科教授)
Hiroki OKADA

1962年岐阜県生まれ。金沢大学文学部行動科学学科(文化人類学専攻)卒業、広島大学大学院修士課程修了、総合研究大学院大学文化科学研究科学位取得修了。博士(文学)。甲子園大学人間文化学部助教授、神戸大学国際文化学部助教授、京都大学人文科学研究所客員助教授等を経て、2008年より神戸大学大学院国際文化学研究科教授、2011年より神戸大学国際文化学部教授。韓国、日本を中心に、東アジア諸社会における近代以降の文化・社会の再編成の問題に文化人類学的視点で取り組み、最近では宇宙人類学の研究も進めている。共著に、『公共人類学』(東京大学出版会)、『宇宙人類学の挑戦——人類の未来を問う』(昭和堂)、『シンドルのつなぐ縁』(人文書院)など。

「宇宙人類学研究会」

東京駅八重洲改札南口近く、銀行が建ち並ぶオフィス街のビルに貸し会議室がある。ある階の1つのフロアが区切られ、それぞれの部屋を貸しているのである。部屋の入り口にはその日の会議の札があり、本日の「会議使用予定団体」の名称が大きく

書かれている。

9月の初秋のある日、忙しく他の会議室に向かう途中で、ふと足を止めるビジネスマンがいた。むろん大半の者は会議に遅れぬように急ぎ足で通り過ぎてゆくものの、たまさか、ふと札に眼を遣り、軽い当惑を浮かべる者、何か(やや侮蔑を含んだように見える)微笑を浮かべる者がいる。そのうちの何人かは、立ち止まり(わずかな時間ではあるが)しげしげと訝しく眺める。その札には「××号室 本日の会議ご利用者：宇宙人類学研究会」とある。もしかしたら立ち止まった者の中には、その日、扉の向こうでは「宇宙人を研究する怪しいオカルト団体もしくは宗教団体が密かに宇宙人について会議を行っているのでは？」と考えた者もいるかもしれない。

残念ながら、部屋の中ではそのような刺激的な議論は行われていないのである。ここで読者の誤解なきようにお断りしたいのだが、「宇宙人類学研究会」の正式名称は「日本文化人類学会研究懇談会 宇宙人類学研究会」といい、れっきとした学会の研究会である。この「宇宙人類学」は、ようやく研究者の間でその存在が認知されてきたばかりの新しい分野である。

宇宙人類学という新分野

最近発行された日本文化人類学会の学術雑誌『文化人類学』の編集後記の冒頭部分は、次のような書き出しで始まっている。「今年は日本の文化人類学にとって記念すべき宇宙元年になりました」。そして次のような文章が続く。

……5月に『宇宙人類学の挑戦——人類の未来を問う』(岡田浩樹・木村大治・大村敬一編)が昭和堂から刊行されたからです。しかし、宇宙人類学 Space Anthropology は「荒唐無稽な」宇宙人・人類学とは違うようです。宇宙人は少ししか登場しませんし……、宇宙戦争の歴史も地球防衛隊の組織についても言及はありません。国家機密に迫る宇宙企画を立ち上げるには、まだまだ克服すべき問題も多そうです。とはいえ、本書全編には、宇宙への探求の意欲がみなぎっています——まさに挑戦と言えるでしょう。(田中2014:217)

田中の好意的な紹介について、文中で言及されている書籍の編者の1人としては、やや面映ゆい気持ちになるとともに、現在の人類学の状況を考えると、アンビバレント(二律背反)的な感情を抱かざるを得ない。「宇宙人類学」がようやく少しは認知されたのではないかという期待とともに、いまだに宇宙人類学は理解されていないのではないかという疑いを抱いてしまうのである。

おそらく大多数の読者(さらには人類学者も)にとっては「宇宙人類学」なる研究に対し、いまだ違和感があるであろうし、「宇宙」を人類学者が研究対象とすることは認めても、人類学における亜流、平たくいえば「色物」のテーマなのではないか、と見ている節もある。「確かに人類学者がさまざまな理由から、フィールドワークに行くことがむずかしくなり、文芸批評や歴史研究などに取り組む場合がある。それがたまたま『宇宙』なのであろうが、ずいぶんと飛躍したものだ」。むろん文芸

批評や歴史研究は、確立した研究分野があり、これに対し人類学者という「一風変わった」視点から見る意味はあろう。

しかし、「宇宙人類学」は人類学的視点から(本来、主な研究対象、フィールドではない)「宇宙」という新たな対象に取り組むだけではない。「宇宙人類学の挑戦」とは、宇宙というフィールドに正面から取り組むことである。これは、本来人類学の基盤にあったはずの学問的な活力と好奇心をとり戻すフィールドなのである。

人類学の目標と「宇宙」

1961年(昭和36)に石田英一郎、泉靖一、曾野寿彦、寺田和夫編による『人類学』が東京大学出版会から発行された。一般教養の人類学の教科書である。日本が高度成長期に向かおうとしていた当時、日本において新しい学問領域として注目を集めつつあった人類学の教科書は少なく、多くは欧米のテキストに頼っていた。その序章で石田は人類学の目標について次のように述べている。

20世紀の後半に入って、現代文明の巨大な機構は、もっと冷酷な非人間的な力で人間を抑圧し、その精神を支配し、これを機械の部品化しつつあるばかりでなく、核兵器の競争を通じて、人類そのものを滅亡の危機にまで追い詰めている。このような奇怪な現象こそ、現代の世界文明そのものもたらした人間の疎外にほかならず、この疎外の克服こそ、人間の直面する課題であるというのが、今日のわれわれの実感であり、また認識であるとすれば、次にはここにいう人間とはいったいなにかという反省が起こる。(石田1961:1)

この石田の文章は、当時の世界情勢、米ソ冷戦下における核戦争の恐怖を反映しており、いささか古めかしい文章という印象は否めない。しかし、今日は現代核戦争の恐怖、人



写真1 月面から撮られた地球(NASA)

類の滅亡といった緊迫した状況にはないとしても、グローバル化が進展する現代世界において、「現代の世界文明そのものがもたらした人間の疎外」が人類の直面する課題であるという認識は、むしろ重要になってきているのではないであろうか。グローバル経済の進展による貧富の格差の拡大、一方で激化する国家間対立、民族対立に加え、たとえばアルカイダ、イスラム国など、近代の国民国家の存在を揺るがしかねないグローバルなテロネットワークの登場、インターネットを介した個人攻撃や情報漏洩、サイバーテロリズムなど、現代社会は危機をはらみ、インターネット、携帯電話、GPSなど、科学技術が発展することによって私たちは豊かになると同時に、新たな不安に直面している。

ところで1961年は、宇宙開発の歴史の上で1つの重要な節目に当たっている。1961年4月12日、ソ連初の有人宇宙飛行船ヴォストーク1号が打ち上げに成功した。これに対抗するように米国初の有人宇宙船マーキ

ュリーが打ち上げられている。いわゆる宇宙への人類の進出が本格的に開始された年なのである。ちなみに、NASA(米国航空宇宙局)はその3年前の1958年に発足しており、11年後の1969年にアポロ11号が人類初の月面着陸に成功した。日本では1960年に科学技術庁に宇宙科学技術準備室を計画局に設置、1962年には科学技術庁に研究調整局が発足し、その中に航空宇宙課が新設された。10年後の1969年には宇宙開発事業団(NASDA)が発足し、翌1970年2月11日に日本で初めての人工衛星「おおすみ」が打ち上げられている。

「地球船宇宙号」とよそよそしい地球

最初の有人宇宙飛行から半世紀が経過した現在、21世紀の現代世界はもしかしたら20世紀よりさらに不安定な危険な時代を迎えつつあるのかもしれない。20世紀後半からの科学技術の発展は、人々の生活を便利にすると同時に、かつて共同体(コミュニティ)や国家という「枠」に守



写真2 人類初の宇宙遊泳(NASA)

られていたひとりひとりの個人は、つかみどころのない「世界」(地球)の前に、裸のまま露出することを可能にしたとも言えよう。

このことを考える上で、月面上から地球を撮った有名な写真は、私たちに現代の世界と人間の関係についてさまざまに考えさせてくれる。いわゆる「Blue marble」(青い大理石)の地球の映像である(写真1)。

よく指摘されるのは、人類は初めて自分たちの住む星「地球」を外から眺め、漆黒の暗闇の中に青く輝く地球に心細さを感じてしまった、地球そして人類をひとつの運命共同体としてとらえ、「宇宙船地球号」あるいは「地球村」という発想が生み出される契機となったということである。地球の表面には「国境」など存在せず、「当たり前なもの」として、確かな存在としてとらえていた近代国家が実はあやふやな存在であることに気づかされたのである。「母なる星」地球というイメージが、その地球を離れた宇宙飛行士が撮影した写真によって生み出されたのは、ある意味皮肉な状況と言えよう。そして人類は母なる地球に抱かれた「子ども」のイメージとしてとらえられる。

もう1枚の写真、宇宙遊泳をする宇宙飛行士の写真も、同じように

「宇宙船地球号」のイメージで語られることがある(写真2)。しかし、この写真はグローバル化の進展と、それがもたらす現代世界の危機の予感が明確なイメージとして示されている。つまり、この写真が呼び起こすイメージのひとつとして、地球の表面で浮遊する、

ひとりぼっちの宇宙飛行士の孤独な姿が見いだせる。地球から遠く離れた宇宙空間から見る地球は、もはや自分の中に抱かれて暮らす場所ではない。なにかよそよそしい、それでいて、1つのまとまりを持った完結した場所のようにも見える。その地球に帰ることはつまり、自分とは無関係に成り立っている1つの場所、システムにぽつんと、たった1人で入り込むことである。これは広大な宇宙の中の孤独な人類というイメージではなく、よそよそしい地球の前に浮遊する孤独な人間というイメージである。

むろん、このようなイメージは一般的ではないであろう。しかし、先に述べたように、グローバル化が世界を覆いつつある現代世界の中における「人間の疎外」を、この写真はきわめてリアルな形で示していると言えるのではないか。

宇宙は人類の根本的課題に答えるフィールド

「宇宙人類学」研究会は、文化人類学こそがさまざまな学問分野の中で特権的な地位にあると主張したいのではない。さらに、「宇宙」についての人文社会的なアプローチの中で人類学が最も重要であるというこ

とを述べたいでもない。むしろ現在の文化人類学は特定のフィールドや集団、テーマに集中する傾向が強くなり、石田が他分野を批判したような「人間という全体のなかの特定の面や部分であって、全体としての人間そのもののすがたではない」研究が主流となっている。ただし、石田が人類学の目的を述べた1960年代、人類学とは類人猿や霊長類研究などを含む、生物学的な人類研究「自然人類学」を含むものであり、その後、文化人類学が分離したという経緯がある。

その後の人類学はアマゾンの熱帯雨林から極北の狩猟採集民、長い王朝、帝国の歴史をもつインドや中国など、世界のさまざまな地域で長期間のフィールドワーク(現地調査)を行い、人類の多様な社会・文化のあり方を明らかにしてきた。そのことにより、近代以降に作られた私たちの「あたりまえ」「自然らしさ」を、離れた場所から見る視点(相対化)を示し、人間の社会・文化の可能性を提起してきた。今日、このような社会・文化の多様性とその可能性に着目することで、グローバル化の進展による世界の標準化、画一化を打破する1つの方向性となりうる。

宇宙人類学の課題

それでは、「宇宙人類学」は具体的にどのようなテーマに取り組むことができるのであろう。まず、現在人類が長期間居住することが非常に困難な宇宙空間において、はたして新しい文化が生成されるかどうかという問題がある。確かに現在の技術水準では、人間集団が一定期間以上、宇宙空間に居住するような状況は、短期的には不可能であるかもしれない。しかし、タイムスパンを数十年単位やそれ以上に設定した場合、それは100%ありえないとは言えない。これまでも、人類は長いスパンの歴史のプロセスでは、自分たちの居住

限界に挑み、さまざまな生活適応をし、その生活世界を拡大してきた。その結果、人類は多様な社会・文化を展開したのであり、今日、その多様性こそが「人類の智」となっている。

ましてや宇宙空間においては地球上とは異なる時間の流れがあり、無重力状況において地球上とはまったく異なる場所なのである。身体やその動き、五感すべてが地球における状況と違っている。時間、空間、そして身体や感覚は社会や文化の基盤であり、宇宙空間においてその基盤が変化したときに何がもたらされるのかは、重要な文化の問題であり、人類学の対象である。

このような基本的なテーマだけでなく、「宇宙」を人類学のフィールドとして考えた場合、多様なテーマが考えられる。たとえば、(1) 高度知的生命体との出会いによって、私たち「人類」は人類全体の社会、文化をどのように、その知的生命体に説明するのか、つまり自らの社会、文化をどのように対象化するのか、(2) 宇宙環境において、集団や社会がいかに適応するのか、それによって、新しい規範、文化が生み出されるのか、(3) 宇宙空間に身体が適応するときどのような問題が起こるのか、(4) 衣食住など基本的な生活文化が宇宙ではどのように変化するのか、新しい生活文化が生み出されるのか、(5) 宇宙進出、宇宙への移住など冒険的な行動の根底にはどのような価値観、文化があるのか、(6) 宇宙空間では新しい「神」、「新しい宗教」が生み出されるのか、(7) 宇宙ステーション、宇宙基地、コロニー居住地でローカルな文化とアイデンティティが変化するのか、(8) 宇宙空間が私たちの認識をいかに変えるか……等、人間の社会と文化の諸問題、さらには「人間とは何か」という根源的問題にまで踏み込んでいくようなテーマが無数に設定できるのである。

たとえば、(3) のテーマ、「宇宙

空間に身体が適応するときどのような問題が起こるのか」を考えてみよう。

無(微)重力状況、閉鎖的な宇宙船の居住空間、宇宙船の影響、時間感覚の喪失など、宇宙空間は地球上のどの場所とも比較にならない過酷な環境であり、技術の発展による環境の改善では、もはや人類の身体そのものが耐えられない状況にある可能性がある。たとえば、一定期間宇宙ステーションに滞在した宇宙飛行士は、地上に戻ったときに、もはや自力では立って歩行することもできない。地上で活動するために必要な筋肉、さらには骨が無重力状況の中で変化してしまっているのである。宇宙空間の過酷な環境は人類の宇宙への進出において乗り越えるべき大きな壁となっている。

ならば、身体そのものを改造して宇宙空間に適応し、十分な活動ができるようにするのはどうであろうか？ 過酷な宇宙空間に適応するために、バイオテクノロジー(生物工学)や身体の一部の機械化を駆使し、身体そのものを変えることは現在の科学技術の水準でも十分可能な方策である。しかし、この場合には、別の大きな文化的問題が発生する。

現在のところ、宇宙飛行士は地球上に帰還することを前提としており、宇宙空間に適応するために身体そのものを「改造」することは想定しにくい。しかし、宇宙空間に長期間滞在することによる身体的変化が常態化する事態も含め、さらに地球に帰還しないことを前提とした「移住」を想定し、生物工学による大幅な身体改造を施し、「宇宙を生活空間とする人類」=「宇宙人」が登場するというのは荒唐無稽な想像上の産物ではない。移動手段としての足を退化させた、あるいは身体加工を施した、または機械による他の移動に取り替えた人間を「人間」として受け止めることができるであろうか？ ここで「人間はどこまで人間か」

「私たちの想像力を越えた姿に変容した人間を同じ『人類』として受け止めることができるのか」といった根本的な問いを私たちは突きつけられるのである。

おわりに

私たちが進めようとしている「宇宙人類学」は、「宇宙文化人類学」ではない。「宇宙人類学」はあらためて「人間はどこから来たか、これからどこへ行くか」といった自然科学、人文社会科学共通の問いに立ち戻り、他のさまざまな分野との対話と協同作業によって、その問いに答えようという試みである。私たちの研究会の英訳は、「Space Anthropology」あるいは「Astro-Anthropology」を用いないのは、このためである(日本語では、すべて宇宙人類学になってしまう問題はあるが)。宇宙(Space)というフィールド(場)に関わること、あるいは創造することが、人類の文化、そして私たちにどのような変化をもたらすのかは、まさに現在起こりつつある社会・文化の問題である。そして、私たち人類は何者であるのか、どこから来て、どこへ行くのか、という根本的な問いに答えるフィールドこそ「宇宙」である。「宇宙人類学」はその根本的な問いに答えようという1つの「挑戦」なのである。その「挑戦」に関心のある方は、ぜひとも『宇宙人類学の挑戦』をお読みいただければ幸いである。

参考文献

- 石田英一郎、泉靖一、曾野寿彦、寺田和夫、1961年、『人類学』東京大学出版会
岡田浩樹、木村大治、大村敬一、2014年、『宇宙人類学の挑戦—人類の未来を問う』昭和堂
田中雅一「編集後記」『文化人類学』79-2:217-218